

# 東帝文ニュース

EAST TIMOR NEWS No.5

2001年11月21日

此処には、大年寄りの人に懐かしい言葉が幾つか有ります。シャバウン（石鹼）、タバク（煙草）、パウン（パン）、ヴィードル（硝子）。葡萄牙語から借用しています。日本の場合は、長崎の出島という所に限定して、葡萄牙人、和蘭人、支那人を住まわせ、江戸時代にとって必要なことだけを吸収しました。曰く、蘭学等々。東帝文では、反対に物とその名称を押し付けられてしまったのです。鎖国と被植民地。どちらが良かったか等は、もう解りません。運命の違いにすぎません。「過去に眼を瞑り、反省しない者に、未来は無い。」嘗ての大日本帝国の同盟国であった国のお偉いさんが言った言葉でしたか。過去に囚われる必要は、有りませんが、過去を忘れてしまつては、現在のことも理解できません。

覚えていますか「Bibi-rusa」。此処のある種の人達は、鹿が好きだった様子です。古くからある四阿屋の柱の彫刻に、鹿が彫られています。ラオスという国の、山の民の家に訪れると、多くの家に鹿の頭骨が飾られています。日本でも、奈良東大寺（実は、春日大社）に代表されるように、鹿をトーテムにする人々が居ります。あのウォルト・ディズニーにも「小鹿のバンビ」という作品があります。リズムカルな跳躍、威厳のある角、雄闘士の戦い、メスの子育て、草食（肉食でない）、どれをとっても厳かな力を感じさせます。東帝文の昔話には、鱧が出て来ます。昔、マカッサルという所で暑さにより死にかけていた鱧を少年が助けました。その鱧は、お礼のために少年が必要な時に、現れることにしました。ある時、少年がその鱧に呼び掛け、その背に乗って東の海に泳ぎだしました。しばらくして、空っぽの場所にたどり着いた時、鱧は年を取り過ぎており、命が尽きると少年の住める嶋になることにより、恩返しをしました。鹿が好きな人々は、その後に移って来たのでしょうか。その前か後には、鶏を愛した人々も来たのでしたね。（東帝文ニュース2号参照）

ビー球で遊ぶ子供たちに会いました。勝利の美酒は、輪ゴムです。昔の人も固い物が好きでした。翡翠と硝子製品では、どちらが古くから愛されたのかは、私は知りません。翡翠も水晶も硬度は、高い物です。そんな物の加工技術は、昔からありました。メキシコで見つかった物の中には、水晶で作られたシャレコウベや日本産翡翠の加工製品が有ります。それらを加工するために、砂を使ったり、草を使ったり、水を使ったりしていました。いずれにしても、充二分に時間を掛けた作業だったことでしょう。時間は、たっぷり在ったのです。今だって、本当は、時間がたっぷりある筈です。その使い方を忘れてしまったのではないのでしょうか。子供達も硝子が好きなのです。硬い物の、賞品が柔らかい物というのは、一種のアンビバレンツ（両極性感情）、煩惱即菩提、物心一如、アウフヘーベン、バウムクーヘン。

一斉に曼殊沙華（彼岸花）が咲き始めました。ここの曼殊沙華は、球体のように花を付けます。日本では、半球と言えましょうか。南半球の東帝文では、冬が終わりこれから夏に向かうのですから、今は、日本の3月頃です。お彼岸といえばお彼岸です。真紅の色は、一緒です。此花が咲く頃、雨季が始まり、野菜の芽が出始めます。多くの人が、豆類、根菜を混栽します。それも山の斜面に多いのです。大豆、金時豆、玉蜀黍、落花生、薩摩芋、タロ芋、ジャガ芋。まるで草食です。昔の日本のお坊さんでさえ、時々肉を必要としましたから、兎をさも四足動物でない如くみなして、一羽二羽とよびました。そして食べました。ことほどさように、人間には、ある程度の動物性蛋白質も必要です。此処では、それが圧倒的に不足しています。そこで、せめて鶏の卵位は、沢山食べられるようにと、適正技術で孵卵器作りに取り掛かろうとしている日本の方が居ります。成功すると良いですね。ところで、甘草も同時に咲き出しました。



縷紅荘主人  
高塚政生